

んとする視差探索時代は、實に學界が惡魔に悩まされた時代であつて、其の間に、宇宙引力の發見や、新星の出現や、天王星乃至小遊星の發見、變星や連星の發見などのことがあつたにしても、學界が眞に明朗化し得なかつた最大原因は、恒星の視差が知れないための、氣味惡さが一般人士の心を暗くさせたのであつた。

視差の研究は、恒星宇宙の探索上、最も根本的な問題である。視差が知れて始めて、吾人は、恒星の距離、光力、直徑、質量、速度等も一舉に知られるに至つたのであつて、こゝに千年の疑問が解けたわけである。しかし視差觀測の成功までには、上述の如く多くの年月と勞力とが費されたと共に、其の後、今日まで、正に一百年の間、この視差觀測の續行が、如何に進歩したかと言ふと、中々、やはり之れは今日でも最も難事業の一つなのであつて、第二十世紀の初頭に於いても、視差の知れた星は漸く一百内外に過ぎず、其の業績の進歩は實に遅々たる有様であつた。最近二十幾年間、長大な望遠鏡に寫眞術が應用されるに及んで、始めて年々數百ケの星の視差が發表される機運となつたのであつて、恐らく、今後も尙ほ此の視差觀測のために殘されたるプログラムは遠遠であると言はねばならぬ。

さもあらばあれ、今や最初の視差が知られてから正に一百年に當る!! 若し歐洲に戰亂の禍ひが無ければ、吾々人類の成し遂げた最も光榮ある此の聖業の成功を紀念する催ほしが何等かの形に於いて擧げられるべき筈であるのだがと思ふ次第である。今日、若しベセルが甦つて來たならば、其の感慨は如何なるものであるだらう!

自分は、このことを可なり以前から考へてゐて、是非“天界”誌上にも一度は視差史を書き、一般人士の興味を起したいものだと、切りに考へてゐたのであるが、生憎、内外多事の折柄であり、又、“天界”紙面が、記事輻輳して、不十分なため、惜しくも1939年が暮れんとする今日まで、どうすることも出来なかつた。只、幸ひ、先日之和歌山に於ける本會總會の紀念講演に於いて、其の所懷の一部を述べる機會を與へられたのは、うれしいことであつた。(1939—11—29記)

皇紀二千六百年歲頭口號

奉 讚 二 千 六 百 年。
地 鑑 人 秀 國 基 堅。
天 孫 臨 降 垂 仁 久。
一 系 連 綿 豈 偶 然。